

日々新聞

第九四号

信原堂

形九一

花源堂誌

大坂北茅一區相生町倉谷
利兵衛方へ明治二年
四月豪賊白刃を
振て押入しあり
利兵衛の幼子足
小警備師一遂
贈る月日をふりておやハ苦ゆ一々常思ひ羽の氷る哀の起卧ふ
志る障も何基の面者も祈請も檢も此難病の心を脱え
父ハ明治八年四月の頃を二期とあてて身よりぬれにッの
不審儀あるハ父を失ひし其夜より七年ぶりて幼子ハ声を
發して忽怒と言舌五音ハ命のあり母の歡
侵曇花の開け一時ハアイウエヲまうて我
夫死折言を悲しみのつまなぬ瀬川
水の行未我子の未頼母鍾あるも理あり

